

世界初、デジタル最新技術で原寸大に再現

至宝「日本の絵巻物」完全復刻シリーズ

監修 秋山光和

# 紫式部日記繪詞

第六回配本

全四巻セット



# 刊行のことば

村田誠四郎 丸善株式会社 代表取締役社長

# 六大特色



絵巻物は日本が生んだ特有の美術様式で、詞書と絵によって展開するその独特の世界は、美術史的にも文学史的にも宗教史的にも風俗・生活史的にも貴重な存在です。

絵巻物はまた、絵と文章による複合芸術であり、時間性とストーリー性をもつた絵画です。それは、今日隆盛をみているマンガ、アニメーションの源流ともいすべきもので、絵巻物はきわめて現代的な興味の対象でもあります。とりわけ「異時同図法」「吹抜屋台」といった表現方法は、マンガやアニメーションの表現法の先駆をなし、コンピューターグラフィックスの映像表現にも影響を与え、世界的にも注目を集めているところです。

絵巻物は、美術館、神社仏閣、大学、個人等において貴重な美術品として厳重に保管されており、特別陳列を除けばほとんど公開・展示されることはありません。特別陳列も海外において開催されることが多く、国内ではその機会に乏しいため、さまざまな観点から鑑賞されるべき絵巻物にふれることは事実上ないに等しいのです。学術用として、鑑賞用として、より身近に、手にとれる原寸の大複製品あるいは復刻品が大いに求められるところです。

戦前から一部の名作絵巻物の複製・復刻はなされていますが、モノクロ図版や縮小版が多く、学問研究や美術鑑賞に耐えるものではありませんでした。また、多くの場合、冊子本のかたちで紹介されており、左手で開き、右手で巻きながらストーリー展開を追い、かつ鑑賞するという、絵巻物本来の醍醐味が失われておりました。

このたび、最新のデジタル技術を駆使して豊かな絵巻物の世界を再現する、日本の絵巻物・原寸大複刻シリーズを刊行する運びとなりました。筆遣いの息吹さえも感じさせる高いクオリティの復刻と、巻物を開き広げ巻き込みながら鑑賞できる巻子本により、絵巻物の神髄を伝えることができます。

## 詳細な解説書き

二十一世紀を迎えた今日こそ、日本独自の文化遺産である絵巻物を完全に復刻する好機と考え、新しい文化事業として、当社の全力を挙げて刊行してまいります。

## 代表的絵巻物を網羅

美術ならびに歴史の分野において専門書や研究書、あるいは大学・短大の教科書・教材において掲載度の高い国宝クラスの絵巻物を選んで復刻。

## 高品質な印刷

最新のデジタル印刷技術と日本の伝統的な職人芸の融合により、内容豊かな絵巻物の世界を忠実に再現。

## 優れた印刷効果と耐光性

バガス紙（中性紙）と耐光性の強いトナーを使用することにより、従来にないインクのテクスチャと抜群の色彩効果を実現。半恒久的な保存が可能。

## 「貼りつなぎ」なし

世界初の絵巻物用画像つなぎソフト（トップパン・フォームズと三洋電機との共同開発）により、何メートルにもわたる絵巻物一枚の用紙に同時印刷することが可能に。実物にもない視覚効果と機能性を実現。

## 実物と同じ巻子本

原物を忠実に再現しているので、左手で巻き広げ、右手で巻き込みながら鑑賞する絵巻物本来の楽しみ方を実現。

それぞれの美術館の学芸員、専門の美術史家による解説。歴史資料文献としての価値も大。

## 監修者のことば

秋山光和



秋山光和 (あきやま てるかず)

大正7年（1918年）京都市に生まれ、間もなく父祖の故地東京に移る。昭和16年東京帝国大学文学部卒業、文学博士、東京国立文化財研究所を経て東京大学文学部教授。昭和54年学習院大学教授。専門は日本の古代中世美術史であるが、中央アジア、敦煌絵画をも研究。

東京大学名誉教授  
日仏会館副理事長  
フランス学士院客員会員  
ブリティッシュ・アカデミー客員会員

### 主な著書に

『平安時代世俗画の研究』(1964年 吉川弘文館)、『王朝絵画の誕生』(1968年 中央公論社)、『絵巻物』(1975年 小学館)『日本絵巻物研究(上下)』(2000年 中央公論美術出版)、“La Peinture Japonaise”(1961年 スイス・スキラ書店、英・独語版も同時刊行)など。

日本の美術にとって、絵物語・物語絵などと呼ばれたいわゆる絵巻物が、大きな役割を果し続けたことはいうまでもあるまい。

「画卷」と呼ばれたこの形式が、他の諸文化と同様中国からもたらされたことは勿論であるが、すでに平安時代初期、九世紀末にはまず中国の物語を和文化した「長恨歌の絵巻」などが作られている。また日本での各種の説話や伝承を絵画化し、詞に絵を続けて絵巻の形としたものが作られたことは、二人の男に求婚された末、生田川に身を投げて自ら命を断つたという生田川処女（うぱらうめ）の哀話を絵画化し、さらに見る者がこれに歌を添えた由を記述した「かかる事どもの昔ありけるを、絵にみなかきて、故后の宮（宇多天皇中宮、八七二一九〇七）に奉りたりければ」とある『大和物語』の一説からもうかがわれる。

この九世紀末から十世紀にかけての物語絵の内容を大別すれば、『竹取物語』のような民間伝承を母体としたものと、『落窓物語』『うつぼ物語』など創作的な主題によるものとに分けて考えることも出来よう。そしてかの『源氏物語』「絵合」の巻には源氏方の『竹取物語』絵巻に対し、弘徽殿方からは新造した『うつぼ物語』（俊蔭の巻）が提出され、それは飛鳥部常則が絵を描き、能書家として知られる小野道風が詞を書いたことまで記されている。

そのほか『土佐日記』の絵、『住吉物語』の絵なども十世紀の文献にはさまざまに見ることが出来る。なお現在では詞しか伝わらないが、永觀二年（九八四）にすぐ

# 紫式部日記繪詞

全四巻 紙本着色 鎌倉時代（十三世紀）

## 紫式部、WHO？

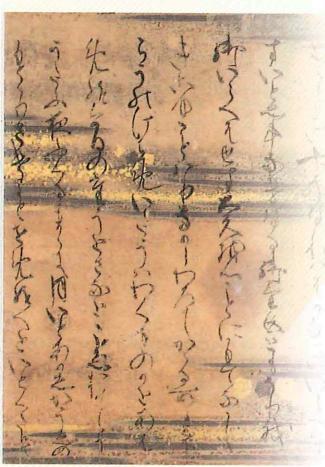
ムラサキ・シキブ、Lady Murasaki、平安時代の女流作家。その紫式部という人について何ほどのことを知っているのかといいますと、どうもよくはわかつていません。その名前、二年ほどの短い結婚生活で夫と死別し、そのあと名作『源氏物語』を執筆したことを知っている以外は……。

## 紫式部と『紫式部日記』

周知のように紫式部というのは女房名で、本名は歴史上の記録としてはのこつていません。当時の公家社会では、女は個人名ではなく父親や兄弟の官名をもつて呼ばれるのが慣例でした。紫式部というのも彼女の父・藤原為時が式部丞に在任したことに由来し、その女ということで最初は藤式部と呼ばれ、のちに長編恋愛小説『源氏物語』の作者として紫式部の名で知られるようになりました。

御堂関白家の当主として権勢をきわめた藤原道長（九六六—一〇二七 当時は左大臣）の長女・彰子が一条天皇の中宮となりましたが、すでに才女の声望が高かつた紫式部は寛弘三年（一〇〇六）にその後宮に女房としてつかえました。寛弘五年（一〇〇八）、中宮彰子が出産のために実家の土御門殿（道長邸）に戻っていた時期に、そこで見聞にもどづいてしたためた日記が『紫式部日記』です。

現存する日記の内容は、彰子が第一皇子敦成親王（のちの後一条天皇）を出産した年の初秋から翌年秋の第一皇子の敦良親王（のちの後朱雀天皇）の出産を経て寛弘七年（一〇一〇）の正月十五日までの二年に満たない期間の記事ですが、道長にとっての初の外孫の誕生という一大慶祝事にまつわる平安貴族生活を的確に描写した記録性に、紫式部自身がうちに秘めた憂愁の情がまじわり、深みのある叙述となっています。三十六歳から三十八歳にかけて書いたものです。



# 『紫式部日記』と『紫式部日記繪詞』

古今東西の文学作品のなかでも燐然とかがやく一大傑作『源氏物語』の作者として知られる紫式部の日記自体は原本がのこつておらず、江戸時代の初期から中期につくられた三十数本の写本が伝存するのみです。

いずれの写本も本文中に欠落部分があり、また誤写などもあつて完全なものではありません。しかし、江戸時代からの諸学者による写本や断簡の研究成果もあって日記の傍注や校正作業も充実し、現在では欠落部分はほぼ全面的に補われていると言われています。これが今日『紫式部日記』とよばれる作品です。この日記が書かれてから約二百年以上経つた鎌倉時代（一二三〇年代）に絵画化したものが『紫式部日記繪詞』です。藤原定家（一一六二—一二四二）の手元にも『紫式部日記』の写本があつたと言われ、定家の引用などからも、その本文は現存する写本とほぼ同じ内容だったと類推できます。その意味では『紫式部日記繪詞』の詞書は『紫式部日記』の本文をつたえる現存最古の貴重な原本と言えます。

江戸時代以来、『紫式部日記繪詞』の詞書は、十三世紀に流行した後京極流の書風であることから後京極良経と言わっていましたが、確証はありません。同様に絵師は藤原信実と鑑定されてきましたが、これも実証できる根拠はありません。

画法的には、国宝『源氏物語繪卷』と同様に、『紫式部日記繪詞』は平安時代に創案された「吹抜屋台」や「引目鉤鼻」の技法や形式を縦横につかい、斜投影法などの方法による大胆な画面構成、室内や登場人物の緻密な描写をおこなっています。これは詞書をもとに絵を描くという平安時代からの「作り絵」の伝統を充分にふまえた様式であり、王朝貴族の優麗典雅な世界を格調高く再現することに成功しています。

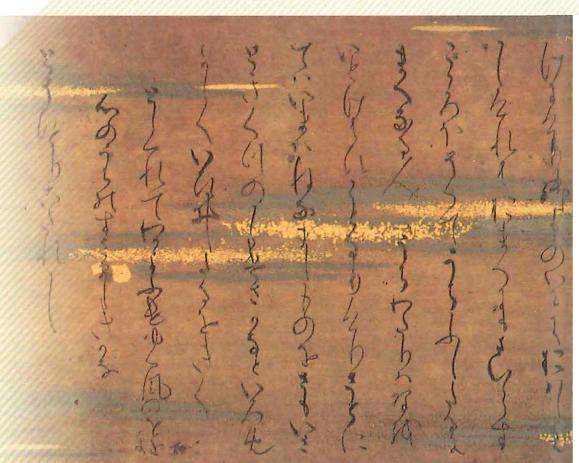


## 現存する『紫式部日記繪詞』

もともと『紫式部日記繪詞』は巻子装の形態で存在していた記録が江戸時代にすでにあり、この作品が全何巻であつたかは興味あるところですが、学会では十巻から十二巻説というのが通



第三巻 五島本

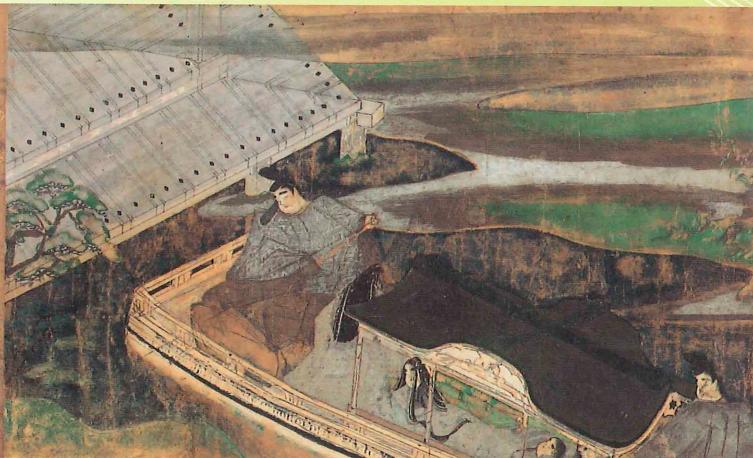


第四巻 日野原家本

明治維新後におこなわれた調査によれば、伝来された『紫式部日記繪詞』で現存しているのは、大別しますと左記の四巻のみです。その後、糺余曲折を経て現在の所有者はすべて変わつており、保存形態もまちまちです。（カッコ内は現在の呼称と所有者）

説となっています。しかし、現存する

『紫式部日記繪詞』の形態は、巻子本、額装仕立て、断簡などまちまちです。所有者も美術館から個人まで複数にわたります。つまり分散所蔵の状態になっていますので、現存作品の原本をまとめて見る機会はまず皆無と言つても過言ではありません。



- 一 蜂須賀家本 阿波国徳島藩主  
二 秋元家本 上野国館林藩主  
三 松平家本 伊予国西条藩主  
四 久松家本 伊予国松山藩主  
一巻 (日野原家本・個人蔵)  
一巻 (五島本・五島美術館蔵)  
(森川家本、文化庁・個人蔵)

『紫式部日記繪詞』のなかで「藤田家本」(詞書五段・絵五段)と「五島本」(詞書三段・絵三段)は国宝、「蜂須賀家本」と「日野原家本」は重要文化財に指定されています。今回はそれに分散している断簡を加えて、現存するすべての作品を巻子本全四巻セットとしてまとめています。現存する全作品の完全復刻は文化遺産の継承という意味では特筆すべき快挙であり、美術鑑賞は言うまでもなく、学術資料としての存在価値も大いに注目されています。

今回、復刻刊行する『紫式部日記繪詞』の内容は次の四巻となります。

第一巻 重要文化財

蜂須賀家本

詞書七段 絵八段  
寸法 縦二一〇ミリ 全長五三七五ミリ

第二巻 国宝

藤田家本

詞書五段 絵五段  
寸法 縦二一〇ミリ 全長四五一五ミリ

第三巻 国宝

五島本

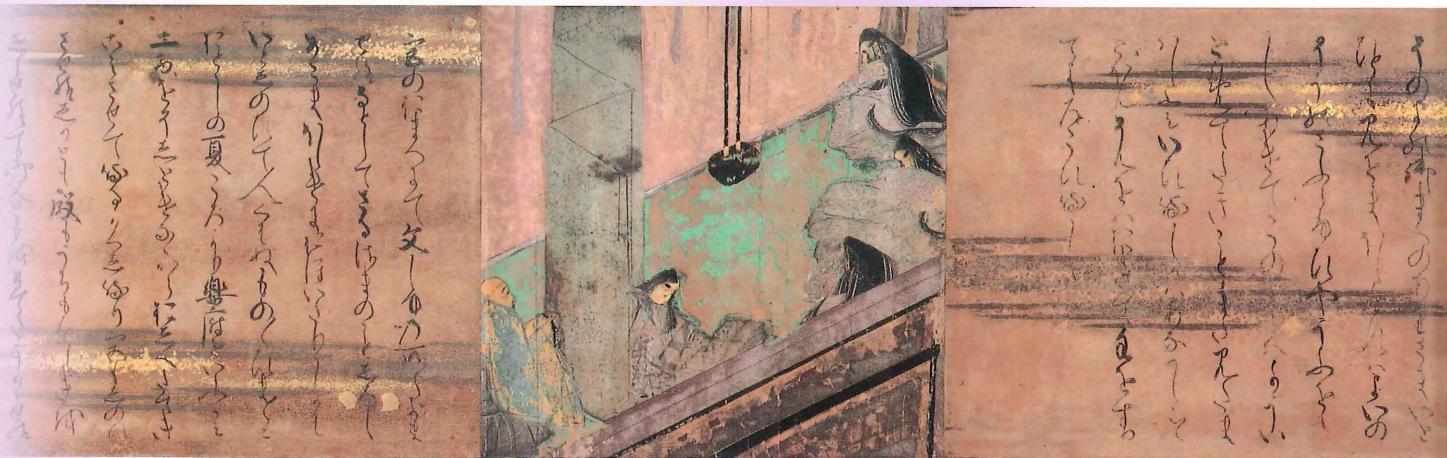
詞書三段 絵三段 ● 断簡 詞書二段、絵二段 (森川家本 個人蔵、文化庁蔵)  
寸法 縦二一〇ミリ 全長四五三一ミリ

第四巻

日野原家本

重要文化財

詞書六段 絵六段  
寸法 縦二一〇ミリ 全長五三一六ミリ



第一卷 蜂須賀家本

## 藤田美術館

Fujita Museum of Art



大阪の実業家・藤田傳三郎（号・香雪1841～1912）、嫡男平太郎（1869～1940）、次男徳次郎（1880～1935）の二代三人が明治初年頃から大正年間にかけて蒐集した古美術コレクションにもとづく美術館。

傳三郎は山口県萩の出身。明治維新後に大阪で事業を興し、大阪商法会議所二代目会頭をつとめ、明治44年には男爵を受けられた。嫡男平太郎は父の没後跡を継ぎ、大阪工業会初代会長、さらに貴族院議員としても活躍した。

明治末期に建築された藤田家の広大な屋敷は昭和20年の空襲でその殆どが焼けたが、美術品などを納めた蔵は幸いにも類焼を免れ、美術館として昭和29年に開館する際、その一部が展示室として改装され。現在も使用している。

コレクションは昭和初期に三度の売り立てをおこなったにもかかわらず、なお約5,000点を数える。その内容は絵画、書跡、漆工芸品、染織品、陶磁器、金属器など多岐にわたり、『紫式部日記繪詞』や『曜変天目茶碗』など9件の国宝と、50件の重要文化財を含んでいる。なかでも茶道具は著名な作品が多く、コレクションの重要な位置を占めている。

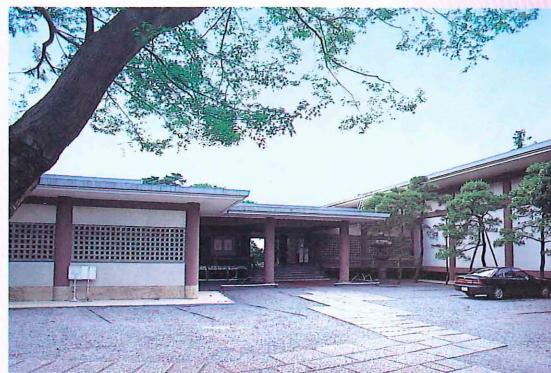
〒534-0026 大阪市都島区網島町10番32号  
3月中旬～6月上旬・9月中旬～12月上旬の開館。  
常設展は行わず、企画展のみ開催。



第二卷 藤田家本

## 五島美術館

The Gotoh Art Museum



東急電鉄の創始者五島慶太（1881～1959）によって昭和35年（1960）に創立された私立（財団法人）の美術館。戦前から戦後にかけて五島翁が蒐集した日本と東洋古美術をもとに、絵画、書跡、茶道具、陶磁器、古鏡、刀剣、文房具など、多岐にわたる約4,000件の収蔵品から構成されている。

『源氏物語繪巻』、『紫式部日記繪詞』などの国宝5件、『大燈国師墨蹟』などの重要文化財49件をふくむ数々の名品の宝庫といわれており、それらの収蔵品を紹介する展覧会を年5～6回、特別展を年4～2回開催している。寝殿造の意匠を随所にとりいた本館建物は吉田五十八の設計。多摩川をのぞむ武藏野の雑木林の台地にある敷地は約5,000坪、珠玉の作品を鑑賞するのにふさわしい環境をかもし出している。

〒158-8510 東京都世田谷区上野毛3丁目9番25号  
電話 (03) 3703-0661

# 体裁・造本

仕様

表紙

唐草花紋様新緞子

見返し

金砂子

軸木

吉野杉

軸先

なら材花梨色塗装

桐箱

古代紫正絹組紐 鬱金包裏各巻一枚

巻緒

四巻入り会津桐印籠仕上げ タトウ入

解説 佐野みどり

佐野みどり (さのみどり)  
解説者略歴



一九五一年東京都に生まれる。一九八二年、東京大学大  
学院（人文科学研究科美術史学専攻）博士課程満期退学。  
群馬県立女子大学助教授、武蔵野美術大学教授、成城大  
学校教授をへて、現在学習院大学文学部教授。一九九七年、  
文学博士（東京大学）。日本美術史を専攻し、物語とか  
ざりをキーワードに造形とイメージの歴史を研究。

主な著書に、『日本美術全集 8 王朝絵巻と装飾経』（共著 講談社 一九九〇年）、  
『新編名宝日本の美術 10 源氏物語絵巻』（小学館、一九九一年）、『まんが日本美術  
史 原始～中世』（共著、美術出版社、一九九六年）、『風流 造形 物語』（スカ  
イディア 一九九七年）、『日本美術館』（共著 小学館、一九九七年）、『じっくり見  
たい源氏物語絵巻』（小学館、一九九〇年）、『新日本の中世 7 中世文化の美と  
力』（共著、中央公論社、二〇〇一年）、『中世日本の物語と絵画』（放送大学教育  
振興会、二〇〇四年）などがある。

企画製作 —— トッパン・フォームズ株式会社

企画協力 —— M B M グループ

刊行 —— 丸善株式会社出版事業部

税込価格 —— 四六八、〇〇〇円（消費税別）

ISBN4-621-04978-X C1371

お問い合わせ先

**MARUZEN-YUSHODO**

丸善雄松堂株式会社 学術情報ソリューション事業部 開発部 〒160-0002 東京都新宿区四谷坂町10-10  
Tel: 03-3357-1449 Fax: 03-4335-9419 Email: archives@maruzen.co.jp http://myrp.maruzen.co.jp/